

世界并不小 —1826

。。。正在离开。我的身体正从这些地方中抽离开，渐行渐远。这里不是特定的哪里，哪里都有的场所。。。

Yuki Onodera

这个作品得名于她从前就开始潜心研究的【移动与身体性】的关系，2004年的作品【Roma-Roma】并不是意大利的罗马，而是用立体相机的两个镜头分别拍摄的另外的两个罗马。2006年的作品【Below Orpheus】寻着失踪事件和超人传说的足迹，辛苦抵达地球上与之相反另一点，用照片记录下了这相隔最远的两地。很明显，显而易见，新作是对这些作品的延伸与发展。

然而这次的作品，奥诺黛拉并没有去哪里，取而代之的，她收集了很多世界各地的地名，用这些地名制作了类似标志一样的素材，把他们放置在有窗的房间进行拍摄。有时“地名等同于文字”的感觉充斥着整个房间。就宛如标志的海洋一般，是超现实主义的作品。将目光移向透着光的白窗，试着发挥你的想象力。

可以发现光的对面就是这些地名标志牌连绵不绝地散布着直到远方。

她的话就说到了这，大概是对照片和绘画的契机有了疑问吧，所以有了接下来的这个询问，究竟文字能不能成为被拍摄的对象呢？

那些与我们相隔很远的极寒和极热的地方，亦或是沙漠的地方，却在这里分别以不同的方位角度，完全不同的语言排列在一起。这些地名，全名中包含着构成它们的山川、河流和山谷等。花名、人名甚至是虚构的动物名也被包含在其中。将时代和地域性等固有的要素与微妙的感觉想方设法的视觉化。如果将这些已成素材的地名作为一个一个的演员来挑选的话，那么房间一下就变成了剧场空间。我们举目凝视着地名，自由自在地发挥着对于这些远方的无限遐想。

在如今这个不论何时都能用网络瞬间获取远方景象的时代，让人觉得地球好像缩小了一样。然而，这些谁都可以轻而易举尽收于眼底的风光，不也恰恰夺走了我们的想象力嘛。

这样的现在在她对这件作品寄予的文章里面有她从发明照片的时代回想的的部分。它很有趣。

「在这之前，还没有照片的时候，我就对远方的地名怀有着憧憬，东西南北各种各样的地名。在头脑中描绘着那里有怎样的风景，并计划着进行大规模的旅行。是地名的音与形催生了我的梦想，想象着那片土地，离我那么遥远，这种超乎寻常的距离却让人心旷神怡。然后想象着这个世界是多么辽阔啊。。。

地名是距离、是空间、是时间、是自然、是历史、是政治、是关系。

我们要去往何处？又到底可以去往何处呢？」...Yuki Onodera

现在，我们每天被高负荷的生活节奏压着度日。反过来看，这些代表地名的文字，正是给了我们透过它神思巡游远方的机会，这不正是让我们放慢生活脚步的作品嘛。

「世界は小さくない - 1826」

"THE WORLD IS NOT SMALL - 1826"

「世界不是小 - 1826」

... 離れている。私の体はこれらの場所から遠く離れている。ここはどこでもなく、どこでもある場所...

Yuki Onodera

この作品は彼女が以前から取り組んでいる「移動と身体性」がテーマとなっている。イタリアのローマではない、別の2つのローマをステレオカメラの2つのレンズでそれぞれ撮影した『Roma-Roma』（2004）。ある失踪事件と超人伝説を追いかけて地球の裏側にたどり着き、もっとも遠く隔たれた2つの場所を写真で記録するという作品『Below Orpheus』（2006）。これらの作品の延長線上にこの新作が置かれるのは明らかである。

しかし今回の作品では彼女はどこへも移動しない。代わりに世界中のあちこちの「地名」を収集する。その「地名」で標識のようなオブジェを作り上げ、窓のある「部屋」に配置し撮影している。時に「地名＝文字」は部屋に入りきらない程に溢れかえる。さながら標識の森と言えようか、シュールな作品である。光差し込む白い窓に目を向けてみる。想像力を働かせてみよう。その光の向こうにはそれらの標識の示す「場所」が遥かかなたまで延々と点在しているということに気付くのだ。

彼女がここまで言葉や文字に拘るのは、写真や絵画のモチーフについての疑問があるからだろう。だからこんな問いも生まれる。「そもそも文字は写真の被写体として成り立つものだろうか？」

遠く離れた極寒の地と熱帯の地、あるいは砂漠の地が、ここでは同列に並びそれぞれが違う方角を差し示す。まったく異なる言語が一緒に並ぶ。地名、つまり名前というものにはそれを構成する山や河や谷などが内包されている。花の名や人物の名、さらには架空の動物の名までもが含まれる。時代や地域性などの固有の要素や微妙なニュアンスをなんとか視覚化する。そのオブジェとなった「地名」を一人一人の俳優として見立てれば部屋は劇場空間と化すだろう。そして私たちは「地名」を眺めながら、それら遠い地について自由自在に想いを馳せることになる。

いつでも瞬時に遠い場所の画像をインターネットで簡単に入手できる現在において、地球のサイズはまるで縮小したかのようにも思える。しかし誰もが簡単に手に入れられ安易に流通する風景は、逆に私たちから想像力を奪ってしまうのではないか。

そんな今、彼女がこの作品に寄せた文章では、写真の発明以前の時代に遡り、回想しているくだりがあって面白い。

「その昔、まだ写真がなかった頃、私は遠い地の名前にあこがれた。東西南北の様々な場所の名。そこがどんな風景か想い描くだけで、大旅行を企てているような気分になった。地名の音の響きとその文字は私を夢想させる。その地を想像すればするほどその地は私から遠ざかり、そのとてつもない遠さは心地よい。そしてこの世界はなんて広大なのだろうと思った……

地名は距離であり、空間であり、時間であり、自然であり、歴史であり、政治であり、関係である。

私たちは何処へ行くのか？果たして何処へ行けるのだろうか？」… Yuki Onodera

現在、私たちは高速でロードされる溢れかえるようなイメージに毎日圧倒されながら生活している。翻って「地名」という文字から遠い地について思いを巡らす機会を与えてくれるこれらは、誠にスローな作品ではないか。